

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：35410

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780436

研究課題名(和文) 知能に応じた自己複雑性介入プログラムの効果の検討

研究課題名(英文) The development an intelligent-based intervention program for self-complexity to decrease depression

研究代表者

川人 潤子 (Kawahito, Junko)

比治山大学・健康栄養学部・准教授

研究者番号：70636092

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、抑うつに関連する自己複雑性と知能の関連を明らかにし、個人の知能特性に応じた抑うつを改善するためのプログラムの開発および効果の検証を目的とした。大学生を対象とした研究の結果、知能のうち作動記憶ならびに肯定的自己複雑性への働きかけが抑うつ低減に影響する可能性が示唆された。さらに、うつ病患者を対象とした研究においては、知能のうち作動記憶や処理速度、さらに否定的自己複雑性への働きかけがうつ病の再発予防において重要である可能性が示唆された。これらのことから、抑うつ予防と再発予防において、知能のうち作動記憶や処理速度に応じた心理療法や心理教育が重要であると考えられた。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the association between self-complexity and intelligence, and developed an intelligent-based program for self-complexity to improve the management of depression. Results revealed that working memory and positive self-complexity might improve depressive symptoms among university students. The research for depressed patients showed that working memory, processing speed and negative self-complexity would be the key of relapse prevention of major depression.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自己複雑性 知能 抑うつ 健康開発

1. 研究開始当初の背景

Linville (1985) は、抑うつに関連する認知的変数として、自己複雑性 (self-complexity) を提唱した。自己複雑性は、自己知識に関する構造で、自己側面 (役割、人間関係、活動等) の数が多く、またそれらの自己側面がより分化している場合に自己複雑性が高くなる。認識している自己側面の数が多く、分化していれば、否定的出来事から生じる抑うつが自己側面全体に及ばないと考えられる。

これまでに、Hershberger (1990) を元に川人他 (2010) が開発した大学生を対象とした自己複雑性に関する抑うつ低減プログラムでは、肯定的な自己複雑性が高まると、プログラム終了2週間後のうつ感情が低減することを明らかにした。そして、効果検討等の改良を加えた肯定的自己複雑性を高めるプログラムを再開発の上、大学生を対象に無作為比較試験による効果の検討を行った。この結果、肯定的自己複雑性が高まると、プログラム終了3か月後の満足感が向上し、6か月後の抑うつが低減することが確認された。

さらに、川人 (2012) は、うつ病患者を対象に肯定的自己複雑性を高めるプログラムを実施した結果、肯定的自己複雑性が向上することで、抑うつが低減する者もいれば、肯定的自己複雑性の変化が乏しく、抑うつが低下もしくは変化を示さない者も存在した。

これらの研究を行った結果、まず、大学生対象の介入研究では、(1) 肯定的自己複雑性がプログラム直後に高まったが、6か月間その効果が維持されなかったこと、また、(2) 抑うつや満足感の変化は、介入直後に認められず、遅延効果のみであった点が問題点として考えられた。他方、うつ病患者を対象とした介入研究からは、対象者のプログラムの理解の程度によって、肯定的自己複雑性による抑うつ軽減効果が異なる可能性が考えられた。つまり、自己複雑性の操作による抑うつ軽減プログラムの効果を検討する際には、認知機能などの個人特性に配慮する必要がある。

これまで、自己複雑性と知能の関連について、処理速度や作動記憶に優れた者は、自己複雑性が高いこと、自己側面の知覚統合が低い者は、自己複雑性が高くなるほどに、心身に悪影響をもたらすこと、一方、自己複雑性と言語性知能とは関連がないことが示されている。これらの知見から、対象者の知的機能の特徴が自己複雑性の操作による抑うつ改善プログラムの効果に影響する可能性が考えられた。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、自己複雑性と知能の関連を明らかにし、個人の知能特性に応じた抑うつを改善するプログラムを開発することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究 1

大学生 40 名ならびに心療内科に通院しており、症状の安定したうつ病患者 21 名を対象として質問紙調査および知能検査を実施した。そして、知能、自己複雑性および抑うつとの関連を検討した。

(2) 研究 2

知能に応じた自己複雑性に関する抑うつ低減プログラムを開発し、大学生 16 名を対象に実施し、自己複雑性の操作が抑うつにどのような影響を及ぼすかを検討した。

(3) 研究 3

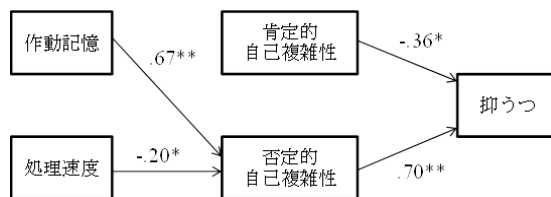
症状の安定したうつ病患者 9 名を対象として、知能に応じた自己複雑性に関する抑うつ低減プログラムを開発・実施し、その効果を検討した。

4. 研究成果

(1) 研究 1

質問紙調査ならびに知能検査の結果をもとに、共分散構造分析を行った。すると、大学生のデータにおいては、知能のうち作動記憶から肯定的自己複雑性への正の関連が認められた。さらに、作動記憶から抑うつへは負の関連が認められた。また、否定的自己複雑性から抑うつへ正の関連が認められた。

一方、うつ病患者を対象とした共分散構造分析の結果では、知能のうち作動記憶から否定的自己複雑性への正の関連が認められ、処理速度から否定的自己複雑性への負の関連が認められた。また、否定的自己複雑性から抑うつへの正の関連が認められた。肯定的自己複雑性からは、抑うつへの負の関連が認められた (図 1)。



** $p < .01$, * $p < .05$

図 1 うつ病患者の共分散構造分析の結果

(2) 研究 2

研究 1 の結果より、知能検査の群指数の「作動記憶」が 90 未満の者には、自己側面の否定的側面を統合・整理するプログラムを実施した (以下、介入群 とする)。また、群指数の「作動記憶」が 90 以上の者には、自己複雑性を高めるプログラムを実施した (以下、介入群 とする)。さらに、研究終了後にプログラムを受ける者のうち、「作動記憶」が 90 未満の者を統制群、「作動記憶」が 90 以上の者を統制群 に割り付けた。

その結果、自己複雑性に関する数値については、介入群 では介入 2 週間後に肯定的自己複雑性が増加したものの、その後なだらか

に自己複雑性に関する数値が低下した。一方、介入群 では、介入直後に肯定的自己複雑性が増加し、否定的自己複雑性が低下した。抑うつ得点に関しては、介入群 はなだらかに減少した。介入群 は、介入直前の抑うつ得点が他の群よりも高かったものの、介入から2週間後にかけて大きく抑うつ得点が減少し、その後維持された。統制群 は、3か月後には抑うつ得点が増加しており、統制群 は介入直前のレベルに介入3か月後に戻った(図2)。

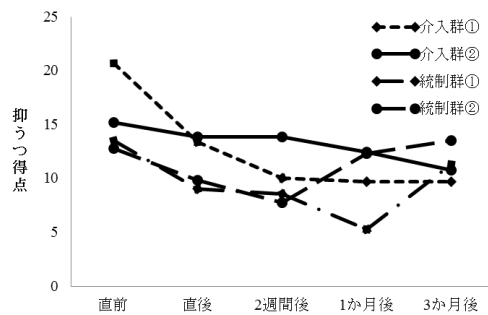


図2 大学生を対象の抑うつ得点の変化

(3) 研究3

研究1の結果より、知能検査の群指数の「処理速度」が90未満の者には、自己側面の否定的側面を統合・整理するプログラムを実施した(以下、介入群とする)。また、群指数の「処理速度」が90以上の者には、自己複雑性を高めるプログラムを実施した(以下、介入群とする)。その結果、介入群 では、特に肯定的自己複雑性がなだらかに増加し、否定的自己複雑性の増減が認められた。一方、介入群 では、肯定的自己複雑性が介入直後に増加し、介入1か月後まで維持された。また、両群ともに抑うつ得点に有意差が認められ、介入により低下した(図3)。

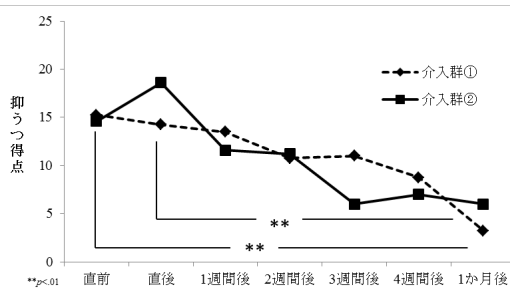


図3 うつ病患者を対象とした抑うつ得点の変化

以上のように、本研究では、大学生ならびにうつ病患者の知能に応じた抑うつ低減プログラムを開発ならびにその効果を検証した。その結果、大学生とうつ病患者では、自己認知を介した知能と抑うつとの関連に相違が認められた。すなわち、うつ病の予防には、作動記憶ならびに肯定的自己複雑性への働きかけが重要と考えられる。一方、症状の安定したうつ病患者を対象とした研究においては、否定的自己複雑性を介して、処理速度

が抑うつに負の関連を示し、作動記憶が抑うつに正の関連を示した。そのため、うつ病の再発予防においては、処理速度、作動記憶ならびに否定的自己複雑性への働きかけが重要となるであろう。

本研究から、知能のうち、特に作動記憶ならびに処理速度は、自己認知を介して、抑うつと関連することが示唆された。

引用文献

- Hershberger, P. J. (1990). Self-complexity and health promotion: Promising but premature. *Psychological Reports*, 66(3_suppl), 1207-1216
- 川人潤子 (2012). うつ病患者を対象とした自己複雑性を高める介入プログラムの効果に関する予備的検討、福山大学こころの健康相談室紀要、7、151-158
- 川人潤子・堀 匡・大塚泰正 (2010). 大学生の抑うつ予防のための自己複雑性介入プログラムの効果、*心理学研究*、81、140-148
- Linville, P. W. (1985). Self-complexity and affective extremity: Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social cognition*, 3(1), 94-120

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

- 川人潤子、中・高年齢男性労働者の自己複雑性と抑うつとの関連の予備的検討、*比治山大学紀要*、査読無、23巻、2017、213-220

[学会発表](計4件)

- 川人潤子、男性労働者の自己複雑性と抑うつ感の関連の予備的検討、第23回日本産業ストレス学会、2015年12月12日、京都テルサ(京都府京都市)
- Kawahito, J. Association between self-complexity and attentional resources among Japanese university students. 50th APS Annual Conference. 2015年10月1日、Gold coast, Australia.
- 川人潤子、うつ病患者の知能と自己複雑性の関連の検討、日本健康心理学会第27回大会、2014年11月1日、沖縄科学技術大学院大学(沖縄県国頭郡)
- Kawahito, J. & Otsuka, Y. The relationship between self-complexity and depression among Japanese depressed patients. 5th Asian Congress of Health Psychology, 2013年8月23日、Daejeon, Korea.

[図書](計1件)

- 川人潤子、風間書房、大学生を対象とした自己複雑性を高める介入プログラムの抑うつ低減効果、2015、全122ページ

6. 研究組織

(1)研究代表者
川人 潤子 (KAWAHITO, Junko)
比治山大学・健康栄養学部・管理栄養学
科・准教授
研究者番号：70636092

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
島崎 悠子 (SHIMAZAKI, Yuko)
悠心療内科 院長